

新島襄「新島襄書簡」

明治22（1889）年2月16日

つしん
慎て

憲法發布を祝賀す

はいていつかまつりそうろう のぶれば
一書拝呈 仕候。陳者

過日は尊館に於て御

出火有之、殆半焼に及
これあり ほとんど およ

ひたる由、新紙上にて承知 仕
よし つかまつり

実に驚駭笑止の至に
きようがい いたり

ぞんじたてまつりそうろう
奉存候。御家族様方には

何にも御怪我等無之候哉。
これなくそうろうや

そのひ
其日は閣下にも多分は

御左右奉伺度艸々

おんこと
御留守の御事にて皆々様には

さぞさぞ
嘸々御心配 被遊候事と
あそばされそうろうこと

えんぼうながらかれこれ
乍遠方 彼是心痛

まかりありそうろう
罷在候。先は不取敢
まず とりあえず

うかがいたてまつりたく
御左右 奉伺度。艸々
そうそう

敬白

二月十六日 新島襄

井上伯爵殿

閣下

つしん
遂伸 尊館御出火の儀

つきかないぎ
に付家内義も笑止千万に

ぞんじたてまつりそうろう
奉存候

令夫人様には呉々も宜しく
くれぐれ

もうしあげたてまつりそうろう
奉申上候。

森大臣殿暗殺の件は

おしろきいりそうろう
実に驚入候 次第に御座候

しょうせいぎ
小生義も寒氣の為著しき
ため

ごさなくそうらえども
進歩は無御座候得共、先漸
まずようやく

ちからつけそうろうあいだ
力付候間、乍憚 御安意
はばかりながら

たまわられたく
被賜度

こいねがいたてまつりそうろう
奉希候。

まで
京都に於て先日來迄に

ため
七千坪を大学の為に土地

ばいどくつかまつりそうろう
買得 仕候。